

# 平成29年度 鳥取県西部地区中学校学びの共同体研究会 実施レポート

期日 平成29年6月19日(月)

会場 大山町立大山中学校

◎ 研究テーマ 「学びの共同体」(協同的な学び)の理論と実践

◎ 指導助言者 学びの共同体スーパーバイザー(元東大阪市立金岡中学校長) 馬場 宏明 先生

1. 打ち合わせ及び授業参観(9:55~11:45)

2. 授業参観後の指導助言(11:55~12:55)

3. 研究授業(14:25~15:15)

3年数学「式の展開と因数分解」(学習指導案は別紙)

(1) 授業参観の視点

①「グループ学習(学習班)」での学び合い

- ・一人ひとりの学びの様子。関わり合いの様子。
- ・互いの学びが深まる学習活動、言語活動等が見られたか。(生徒同士の関わり合い)
- ・生徒の学びを深めるための働きかけはどうであったか。(教師と生徒の関わり合い)

②「課題の提示」

- ・「共有課題」「ジャンプ課題(発展的課題)」等の段階的な課題設定の質、内容は適切であったか。(学びが深まる学習活動、言語活動等につながる内容であったか。)
- ・教師の課題提示の仕方はどうであったか。

(2) 授業参観の留意点

- ・参観者は、生徒に話しかけない、机間を歩き回らないで参観すること。

4. 研究協議及び指導助言(15:30~17:00)

(1) 大山中学校の今年度の研究の取り組みの説明

○ 研究主題 「主体的に学び、対話し、考えを深め合える生徒の育成」

○ 取り組みの重点

- ・言語活動の充実を図る指導の工夫
- ・「学び合い」を大切にした授業づくり

(2) 授業者の自評

(3) 授業参観者からの報告及び質問

- ・授業参観者を6つのグループに分けて、それぞれ授業参観の視点に沿って意見交換を行った。その中で参観して疑問に感じたことも含めてグループ毎にまとめて報告した。

(4) 指導助言

今回の研究授業の課題設定はよく考えられたもので、難易度も適切であった。しかし、共有課題の段階で類題をもう少し数多く生徒に与え、ジャンプ課題につなげてよかったのではと思われる。それは、ジャンプ課題は難易度が高く設定してあったため、自力解決できる生徒は数少ないと予想される。そうすると生徒は既知からヒントを見つけようとする。本時では共有課題に戻って、ジャンプ課題を解く糸口を見つけようとする。そこでヒントを自ら見つけたときに生徒は喜びを感じ、楽しさを感じる。それらを感じると達成感や学習意欲の向上につながる。しかし、本時では、生徒がなかなか課題を解くことができなかつたときに、細切れにヒントを多く出してしまった。そのため、生徒は思考をやめ、授業者からのヒントを待つ受け身の姿勢になってしまった。生徒が自ら考える力が学力につながるため、もう少し様子を見て、ヒントを出すタイミングと提示の仕方を工夫するべきであった。

授業の最初に前時の復習をすることがある。しかし、これは不要である。前時の内容も使って本時の課題を解決していく場合には、グループ活動の中で共有課題やジャンプ課題を解く過程において、ノートやワーク、教科書を見直すなど、自然と生徒たちは復習をする。そのため、授業の最初に一斉で前時を復習をすることは無駄な時間となる。

学習の基本は個人学習である。グループ活動は個人学習の共同化である。そのため、課題内容や生徒の実態によっては積極的な関わり合いが見られない場合もある。しかし、そのような場合でも、生徒一人ひとりが課題解決に向けて一生懸命考え続けていくことが重要である。そのような生徒が増えると授業の雰囲気も変わる。大山中学校の生徒は人間関係が良好であるため、授業内で課題解決に向けて、よりよい状態を作り上げることができる環境にある。そのため、教師一人ひとりが生徒の現状を見取る力を伸ばし、生徒が自ら考えたくなるような課題設定や考えが深まる仕掛けを工夫していくことが大切である。